世界大食い選手権

人喰いモンスターにより生きたまま
貪り喰われる美女達

作者　大黒達也

『世界大食い選手権』

一・はじめに

太平洋に浮かぶ絶海の孤島で、世にも残酷でエロティックな大食い大会が繰り広げられる。出場者は、オーグル族のアレフ、狼男のピータそして美女を生きたまま丸呑みにする怪女アナコンダというモンスター達であった。食材は若くて美しく極上のプロポーションを持つ女達。果たして、奴らは何人の美女を喰い尽すことができるのだろうか。

二・登場人物

暗黒　太郎（アンコク　タロウ）
闇のチャンネル999の新企画番組『世界大食い大会』の司会者。長身で痩せ形。常に上下黒のスーツを着て、サングラスをかけている。

小悪魔（こあくま）　エリ
太郎のアシスタントを務める。世界一の美貌とプロポーションの持ち主。性格は淫乱であり、男でも女でも愛することができるバイセクシャル。

オーグル族のアレフ

ヨーロッパ地区の代表者。体長三メートルの巨体に岩をも噛み砕く、強力な顎の持ち主。美女を生きたまま、噛み裂き貪り喰うのが何よりも好きなクレージモンスター。

狼男のピータ

北米代表　狼男のピータ。体長三メートルの巨体に戦車さえもひっくり返す怪力の持ち主。何よりも美女とのSEXが生きがいであり、美女を何度も逝かせなければ、その肉を喰うことはしない。

アナコンダ

中国代表で体長三メートル体重一トンの巨大女。極上の美女に目が無く、散々嬲り抜いた後で、顎が外れる巨大な口で、生きたまま丸呑みにしてしまう。丸呑みにされた美女は、胃の中で無数の突起に犯されながら、強烈な胃液で溶かされていく。

三．目次

プロローグ
第一章　大食い大会の食材として喰われる美女達
第二章　食べられる快感
第三章　新たなる食材を求めて
第四章　視聴率は絶対
第五章　優勝賞品の美女
エピローグ

四．本編

プロローグ

深夜〇時三十分、太平洋に浮かぶ絶海の孤島では、世にも恐ろしく官能的なテレビ番組の収録がスタートしようとしていた。

「どうも、こんばんは。これから、闇のチャンネル999の新企画番組がスタートします。題名は、大食い世界大会／モンスター編です！司会を務めます暗黒太郎です」

上下黒服に身を固め、長身で痩せ型のサングラスをかけた中年男が、TVカメラの前に現れた。

「コンバンワ！アシスタントの小悪魔エリです」

こちらも黒色のワンピースを着た若くて、エキゾチックな顔立ちをした美女が映し出された。長い太腿が妙にエロッティックな雰囲気を醸し出していた。

「エリちゃん。いつもながら美しいね」

「あら、太郎さんたら。お上手なんだから。さあ、始めましょうADが怖い顔で睨んでいるわよ」

「そうだね。始めようか。さあ、TVをご覧の皆さん。今晩は眠れなくなりますよ。世界大食い大会／モンスター編を始めます。エリちゃん。可愛い声で本日の出場者を紹介してちょうだい！」

TVカメラは司会者の暗黒太郎と、小悪魔エリのアップから、頑丈な鉄格子に囲まれた空間にスイッチ

した。広さ三十畳ほどの空間には、三つの巨大な影が蠢いていた。
「じゃあ、まずは最初にルーマニアから参加したオーグル族のアレフを紹介しますね」
エリが、鉄格子の一角に設けられた扉を開け、中に入った。中から、獣の凄まじい咆哮が湧き上がった。
TVカメラが悪鬼の形相をした巨大な男を映し出した。両眼が真っ赤に輝き、巨大な黄色い牙が口元から食み出していた。身長はゆうに三メートルは超えているだろうか？
目の前に佇むエリに掴みかかろうとするが、両足首が鋼鉄製のベルトで固定されているので、その場を動くことができなかった。
「彼は、ヨーロッパ界で実力ナンバー一の大食い選手です。ゾクゾクしますね」
エリはオーグル族のアレフを挑発するようにスカートを捲り上げ長い太腿を見せ付けた。再び、巨大な咆哮が湧き上がり、鉄格子の壁が振動した。
「エリちゃん。そんなに挑発しないでよ。ベルトが壊れたら食べられちゃうよ。次を紹介してよ」
「済みません。つい興奮しちゃって。じゃあ、次の選手を紹介しますね。北米代表の狼男のピータさんです。毛むくじゃらな胸がセクシーですね。何か、興奮しちゃいます」

「いいぜ。お嬢ちゃん。もっと近くにおいでよ」
TVカメラは、オーグル族のアレフから、全身毛むくじゃらの格好をした体長三メートルほどの狼男に向けられた。
「お声もセクシーですね。私って美味しそうですか？」
「ああ、涎が出てきたぜ。その旨そうなケツを食わしてくれるなら、何でも言うことを聞いてやるぜ」
「このお尻、気に入ってくれましたか？」
エリはカメラの前で、パンティを脱いで、尻を狼男の方に向けた。狼男のピータは低いうなり声を上げて、前に全身を投げ出すようにした。狼男も両足首を鋼鉄製のベルトで固定されているので、その場から動くことはできない。
長い鼻面を全リの桃尻に向けて、必死に突き出した。美尻の近くでカミソリのような牙を打ち鳴らした。
「エリちゃん。視聴者にサービスし過ぎだよ。次にいって頂戴！」
暗黒太郎が、両目を血走らせて、マイクに叫んだ。
「じゃあ、最後の選手を紹介しますわね。中国代表のアナコンダです」
エリの紹介が終わらぬうちに、TVカメラは、身長三メートル以上はあり、ビア樽のような体格の中年女に向けられた。
「紹介はいいから、早く食わせてくれよ。何ならアンタでもいいよ。こっちにおいで。オバサンと楽しいことを

しよう』
『エリちゃん。アナコンダに近づいたら、駄目だよ。呑み込まれちゃうよ』
太郎が、心配そうな表情で、エリの美尻を食い入るように見詰めていた。
「どんな風に遊んでくれるのかしら」
エリは、着ていたワンピースを脱いで、全裸になった。ブラジャーはしていなかった。シミひとつなく、雪のように白い美肌にスポットライトが当てられた。
エリは、挑むようにアナコンダに向かって数歩歩み寄った。そのとき、アナコンダの口から長い舌がムチのように飛び出し、エリの裸身に巻きつこうとした。エリの裸身が、体操選手を思わせる機敏かつ優雅な動作で飛び上がり、間一髪で舌から逃れた。アナコンダが悔しそうにコンクリート製の床を拳骨で叩いた。
「それでは、これから極上の食材達を紹介しますね」
エリは何事も無かったように、全裸のまま、鉄格子で囲まれた部屋を後にした。

第一章　大食い大会の食材として喰われる美女達

檻から出てエリが向かった先は、スタジオの隅に作られた仮説ステージだった。広さ三十畳ほどの床には、全裸で猿轡を噛まされ、後ろ手を縛られた若い女達が、数十人、無造作な感じで転がされていた。

エリがひとりに近付き、猿轡を外した。
「お願い！助けて！殺さないで」
高級モデルも及ばないほどの美貌を持った女が、泣き叫んだ。
「何て、美しいのかしら。女の私でも惚れ惚れしちゃうわ。それになんて柔らかい身体なのかしら」
エリは、髪を振り乱し鳴き喚く女の乳房を鷲掴みにし、股間に手を入れて膣を嬲った。
「どうだい。エリちゃん？食材の具合は？」
「最高ですよ。どの女も最高にイケテます！視聴者の皆さん。ここにいる美女達が今夜の食材です。皆、最高級モデルも及ばぬ美女揃いです。捕らえられてから一ヶ月間、果物と野菜だけで飼育していますので、味は折紙つきです。選手達も大満足でしょう」
「じゃあ、そろそろ始めようか」
太郎が言うと、戦闘服に身をかためた屈強な身体つきの男達三人が、仮設ステージに上がり、三人の美女達の猿轡と縛めを外し、肩に担ぎ上げた。女達の泣き叫ぶ声がスタジオ内に響き渡った。カメラは、女達の白く盛り上がった美尻が震え戦く様子を映し出していた。
エリが、全裸のまま、彼らを選手達が待つ檻に誘導した。
檻の中では、獣達が歓喜の雄叫びを上げていた。あまりの興奮に床が抜けそうなほどであった。

モンスター達の前に、三人の美女達が並べられた。男達が彼女達の腰を後ろから押さえつけていた。三人の美女達は、モンスターから身を逸らすように、背筋を仰け反らせ、視線を背けていた。皆、泣き叫んでいた。

「じゃあ、皆さんにルールを説明しますね。これから時間無制限の早食い大会を始めます。何人食べてもかまいません。その代わり、ひとりを丸ごと食さなければなりません。骨もすべてです。お代わりするときは『お代わり下さい』と宣言してください。皆さん、言えますか？」

エリが説明しながら、モンスター達の顔を順番に見詰めた。オーグルのアレフが「オー、オー」と意味不明の唸り声を上げた。

「エリちゃん。アレフは適用外でいいよ。食べたら次の女を渡してあげて」

「わかりました。ではスタートしますね」

エリが高々と右手を上げた。

「世界早食い大会を始めます。いいですね。ヨーイ、ドン」

エリの掛け声とともに、男達が女達の腰を勢いよく押し付けた。アレフの反応が一番早かった。身長百七十センチくらいで、雪のように白くすべすべの肌を持つ裸身を両手で引き寄せ、太腿を大きく開脚させ、股間に喰い付いた。すぐに女の断末魔と、骨を

噛み砕く音が響き渡った。アレフは女の膣を丸ごと噛み取り、さらにムッチリとした太腿に齧り付いた。鮮血がアレフの顔面を汚した。アレフは歓喜の笑みを浮かべながら、太腿肉を噛み裂き呑み込んだ。

極上の裸身が噛み砕かれ、呑み込まれて行く。美女は白目を剥いて、全身を震わせていた。

その頃、狼男のピータは、捕まえた女の尻を目の前に持ち上げ、激しい勢いでアヌスを細長い舌で舐っていた。女は、恐怖に美しい顔を歪めながらも、尻をピータの細い鼻面にこすり付ける様にしていた。

「おっと、ピータは余裕ですね。食べる前に逝かせるつもりでしょうか！」

司会者の太郎が、マイクを握り締め、興奮の面持ちで叫ぶように言った。

ピータの長く硬い舌が女の膣に潜り込んだ。膣壁に激しく擦り付けた。女が鋭いあえぎ声を上げて、絶頂に達した。

ピータはぐったりとした女を自分の方に向けさせ、大きく口を開けた。鋭い牙から涎が滴り落ちた。

「いただきます！」

女の両脇を持って、女の頭部に噛み付いた。骨が砕ける音がして、女の頭部が卵のように粉砕した。女の桃尻が一瞬ブルブルと振るえ、尿道から、大量の尿が噴出した。ピータは歓喜の表情を浮かべなが

ら、脳漿を啜り、頭蓋骨を噛み砕いていく。ピータの食欲は凄まじかった。頭部を食べつくし、上半身を噛み砕いていく。盛り上がった白い乳房を噛み裂き、大して租借せずに呑み込んだ。

一方、アナコンダは捕まえた女の裸身に、驚くほどの長さを持つ舌を巻きつけていた。女の柔らかい膣に舌の先が出し入れされていた。女は、膣壁を擦られる凄まじいまでの快感に、死の恐怖を忘れ喘ぎ続けている。

アナコンダは、そんな女の肢体を食い入るように見詰めていた。巨大な口元からは大量の唾液が滴り落ちていた。アナコンダのグローブのような手が、女の盛り上がった白い乳房を包み込むようにして乳首を刺激していた。

会場内に女の鋭い喘ぎ声が響き渡った。女は、全身を仰け反らせるようにして、アナコンダの舌に巻かれながら絶頂に達した。アナコンダは、ぐったりとした女を頭部から巨大な口に呑み込んだ。女の美尻がブルブルと震えだした。股間から、尿が激しい勢いで噴出した。女の長く形のよい両足が激しく動いていた。アナコンダの口が極限まで開かれていた。極上の裸身がゆっくりとアナコンダの口内に呑み込まれて行く。既に腰の位置まできていた。やがて、剥き

卵のようにすべすべで真っ白な尻が、呑み込まれ、最後には爪先が口内へと呑み込まれた。

「お代わりください」

アナコンダが満足そうな笑みを浮かべながら言った。檻の入り口には、戦闘服を着た屈強な身体つきの男達が、それぞれ全裸美女を肩に担いで待機していた。先頭の男がアナコンダに、トップモデルであり、売り出し中の美人女優に似た香月里奈という名の女を手渡した。里奈は超有名商社に働くOLで、今年で二十三歳になる。

「お願い。殺さないで！死にたくない」

里奈が、アナコンダの丸太のような腕に抱きとられながら、泣き叫んだ。

「何て。いい声で泣くんだろうね。それに顔も身体も極上物だよ」

アナコンダの小さな目が、極上の裸身を舐めるように見詰めた。

「いや！食べないで」

「食べるなっていったって、これは大食い大会だよ。お前は料理なんだ。どれ、味見をさせてもらうかね」

アナコンダの巨大な口から長大な舌が蛇のように出てきて、むき出しにされた女の膣に突き刺さった。

「ギャー！」

女は少し茶髪が入った髪を振り乱し、背筋を仰け反らせた。股間から大量の尿が噴出した。アナコンダは、満面の笑みを浮かべながら、舌で里奈を犯し続けた。グローブのような手が、美しい乳房を這い回っていた。

暫く愛撫は続いた。最初は泣き叫ぶだけであった里奈の腰が、少しずつ動き始めた。よほど、アナコンダの愛撫が巧みなのだろう。里奈は死を目の前にして、絶頂に達しようとしていた。

里奈が達する寸前、舌が動きを止めた。少ししてから再び、死の愛撫が開始された。

舌は里奈が絶頂に達する前に必ず、動きを止めた。アナコンダは、里奈を寸止め状態にしていた。肉体のみならず女の精神まで貪ろうとしていた。

里奈は、アナコンダの舌による愛撫で気が狂いそうになっていた。アヌスにはアナコンダの図太い指が根本まで挿入され、直腸をかき回されている。アナコンダの舌と空いている方の手で宙に浮かされながら、長い茶髪がかった髪を振り乱し、身悶えしていた。何度も逝きそうになり、その度に寸前で愛撫を止められた。既に肉体も精神も限界であった。意識が朦朧としながらも美しい裸身は反応を止めない。不意に膣内の舌が激しく、膣壁を擦り始めた。里奈は全身を仰け反らせるようにして、アクメに達した。股

間から、激しい勢いで潮が噴出した。アナコンダは歓喜に目を輝かせながら顔で受けた。

里奈は朦朧とする意識の中で、アナコンダの口内に尻から呑込まれていくのを感じていた。突然死の恐怖が蘇った。両手両足を激しく動かし必死に抵抗したが、アナコンダの怪力には遠く及ばなかった。

シミひとつなくむき卵のような白い尻全体が口内に押し込まれた。生暖かい唾液に包まれ、巨大な舌で尻全体を包み込まれ、吸い上げられた。

尻の次には胴体が呑込まれていく。乳房も巨大な舌で包み込まれた。

里奈は身悶えし、泣き叫んだ。アナコンダの巨大な手が里奈の肩を掴み、口内に押し込んでいく。

里奈の美尻はアナコンダ喉を通過していた。今、外に出ているのは顔と爪先だけであった。

里奈は泣いていた。全身を粘膜状の口内壁に包まれ身動きはまったくできなかった。

やがて、里奈の美しい裸身はすべて、アナコンダの口内に呑込まれた。

数秒後、里奈はアナコンダの胃の中でまだ生きていた。窒息で意識は遠のいていたが、全身を強烈な酸で生きたまま解かされる極限の苦痛を感じていた。女は、激痛の中で意識を失い、全身を溶かされながら生涯を終えた。

狼男のピータは、泣き叫ぶ色白で美肌の美女を四つん這いにさせて、盛り上がった白い尻を美味しそうに舐め回していた。背が高く素晴らしいプロポーションの女は、女子大生で曜子という名前であった。まだ十九歳という若さであった。

サークルの二次会で組織に拉致され、この島に連れて来られたのだ。すべてが、悪夢のようであった。今は全裸にされ、巨大な狼男に尻を舐められているのだ。

「ピータ。早く女を食べたら。お代わりも用意してきたんだから」

小悪魔エリが、ピータにではなくアナコンダ用に運んできた美女を肩に担ぎ、檻の中に立っていた。

「そう焦るなって。美味しいお肉にするために下味をつけているところさ。どうだい。俺の愛撫で潮を噴いているぜ。こいつが最高のソースになるんだよ」

「ただのオシッコでしょう。アンタにお尻を舐められたら、どんな女だって、お漏らししちゃうわよ」

「まあ、いいから。もう少し楽しませてくれよ」

ピータは曜子の尻を両手で押さえつけた。股間の黒々として細長い男根を深い尻の割目に入れ、アヌスや膣に擦り付けた。すぐに男根を膣に突きこんだ。

「いや！」

曜子が背筋を仰け反らせ絶叫した。

「駄目よ。お料理が口をきくなんて」

エリが、担いでいた女を床に横たえ、曜子の口に

吸い付いた。ピータからはある程度の距離を保っていた。

「おおおお……。締まるぜ。日本の女は最高だよ。食べてよし、抱いても極上ときている」

ピータは、大量の涎を垂らしながら、腰を激しく振り、曜子の膣に男根を出し入れさせた。

「いや。お願い。許して！」

曜子は黒髪を振り乱しながら泣き叫んだ。

「だから、しゃべっちゃ駄目でしょう」

再び、エリが曜子の口に吸い付いた。舌を吸出し存分に舐めた。

「もう、もう駄目だ。たまらん！」

ピータは曜子の盛り上がった白い尻に股間を叩きつけるようにして果てた。

逝く瞬間に男根を抜いたので、白濁した精液が、小悪魔エリの顔面を直撃した。

「いやね。ピータ。何てことするのよ。嫁入り前なのよ。責任とってもらわなきゃ」

エリは顔面にこびりついた精液を手で拭った。エリは、シャワーを浴びるために、女をアナコンダに手渡し、檻を出て行った。

曜子は、ぐったりとして伏せに横たわっていた。盛り上がった白い尻が無残に震えていた。再びピータが曜子の腰を、毛むくじゃらの両手で抱き上げ、瞬時に怒張した男根を今度はアヌスに突き入れた。

「いや。そこは止めて。死んじゃう！」
曜子は全身を震わせ、号泣した。
「こっちの方が締まるぜ。こんな気持ちのいいケツは初めてだ」
ピータは、淫らな笑みを浮かべながら、曜子のアヌスを犯した。毛むくじゃらの手でクリトリスを刺激した。アヌスを犯される苦痛とクリトリスから得られる快感に曜子の心は張り裂けそうになっていた。
「もう駄目だ！出すぞ！」
「いや！」
ピータは逝く瞬間に男根を抜いた。大量の精液が宙を飛び、床を汚した。曜子の白い裸身がぐったりと横たわっていた。ピータは両足で曜子の腰を掴んで持ち上げた。

「いた・だ・きま・す！」
荒い息を吐きながら、ムキ卵のようにすべすべで、シミ一つ無い白い尻に牙を突きたてた。
「ギャー！」
曜子が全身を震わせ、絶叫した。
ピータの鋭い牙が柔らかい尻を噛み裂き、血塗れの肉塊を食い千切っていく。美味そうに租借して

は飲み込だ。尻肉をきれいに平らげ、むっちりとした太腿に喰らいつき、柔肉を噛み千切った。出血多量で虫の息となった曜子を仰向けに横たえ、腹部を鋭い鍵爪で縦に切り裂いた。長い鼻面を腹腔に入れて、血塗れの内臓を貪り喰った。

第二章　食べられる快感

「さて、皆さん。エリちゃんが、決死の取材に挑みます。内容については本人からのコメントがあります」

カメラアングルが、サングラスをかけた暗黒太郎からスタジオから別室に移った左リの裸身へと切り替わった。

「はい。良い子の皆さん。私が皆さんのご期待に答えて、アナコンダに呑み込まれる際の実況をお伝えします。これから、その準備をしますね」

全裸のエリは透明な液体が満たされた浴槽に全身を浸した。浴槽から上がり、今度は、大き目の宝石が付いた指輪二つを左手の人差し指と中指に嵌め、さらにマウスピースを口内に装着した。

「準備はこれで終わりです。浴槽に満たされた透明な液体はアナコンダの強烈な胃液から全身を保護する成分が含まれています。目には見えませんが、私の全身にコーティングされました。液体を飲み込んだので口内や胃壁も保護されます。効き目は胃液に包まれてから一時間です。中指に嵌めた指輪の宝石部分にはアナコンダの胃液を逆流させる強力な嘔吐剤が入っています。これを使いアナコンダの口から脱出します。人差し指に嵌めた指輪の宝石部分には一台目の超小型カメラが組み込まれています。

さらにマウスピースにはもう一台の超小型カメラとマイ

クが組み込まれています。マウスピースには、超小型の圧縮酸素ボンベも組み込まれており、約十分間呼吸が可能となります。では撮影を開始しますね。皆さん。エリを応援してくださいね。万が一に、脱出に失敗し本当に食べられちゃっても、泣かないでくださいね」

最後にはカメラに向かい投げキッスを送った。その足で、スタジオに向かった。

モンスター達が大食い競争を行っている檻に入った。内部では、今も熾烈な競争が行われていた。オーグル族のアレフが美女五人を食べて、六人目の女を引き寄せ、盛り上がった白い尻を噛み裂いたところであり、一人分リードしていた。狼男のピータは相変わらず、与えられた女を舌や男根を駆使して逝かせてから、貪り食らっていた。中年女のアナコンダは、今五人目を呑み込んだばかりだ。余裕の笑みを浮かべながら、「お代わりお願いします」と催促した。

エリが盛り上がった白い尻を振りながら、ゆっくりとアナコンダに近付いていく。アナコンダの瞳が一瞬輝き、長い舌を突き出した。エリの足首に巻きつき、頭上に高々と逆さまに吊り上げた。エリが絶叫を上げ、逆さ吊りにされながら身悶えした。

「やっと捕まえたよ。アタイはお前をずっと狙っていたんだよ。お前を食べても一人分カウントされるんだよね」

「お願いです。お助けください！」
エリは泣き叫んだ。迫真の演技だった。
「それは無理だね。お前のような極上の女を喰えるんなら、死んだって構わないよ」
長大な舌がうねり、エリの裸身に巻きついていく。足首に巻きついていた舌先が離れ、エリの膣に突き刺さった。
「嫌！」
エリが背筋を仰け反らせ、絶叫を上げた。舌先はエリの膣内で微妙に蠕動した。膣壁を刺激される快感に、エリは早くも身悶えを始めた。カメラが快感を貪るエリの美貌をアップで捉えた。舌先は一層激しく膣壁を刺激し、エリは一度目のアクメに達し、大量の潮を噴いた。
「まだまだ、こんなんじゃ済まされないよ」
膣口から舌先が抜かれ、今度はアヌスに差し込まれた。舌先が直腸内をかきまわし、舌の側面が膣口やクリトリスを刺激した。余りの快感にエリは髪を振り乱し泣き叫んだ。周りで見ていた戦闘服に身をかためた屈強な身体つきの男達三人が、己が男根を扱きながらエリの乱れぶりを見詰めていた。
長大な舌に巻きつかれ、逆さ吊りにされ、アヌスや膣を激しく刺激されたエリは二度目のアクメを迎え、全身の力が半ば意識を失いかけた。

アナコンダの口元から大量の唾液が滴り落ちた。ゆっくりと足リを極上の尻から呑み込んでいく。そのとき足リの両目が大きく見開かれた。

「物凄い快感でした。流石の私ももう少しで意識を

失うところでした」

エリが尻を呑み込まれながら、実況を開始した。

「呑み込まれたお尻がモゾモゾします。アナコンダの口の中は生暖かく、無数の柔らかい突起がありそれが、お尻に吸い付いて、微妙な振動を与えてきます。ああ……。いいわ。変になりそう……。御免なさい。今、感じちゃいました。だって、変なところ舐めてくるんだもの」

アナコンダは、徐々にエリを口内へと押し込んでいく。極上の尻を呑み込み、太腿と乳房が口内へと消えた。

「いやん。そんなところ舐めないで。今、乳首を舐められています。それだけじゃありません。お尻や背中や太腿やオマ※コが唾液でベトベトにされ、無数の突起で刺激されています。気持ち良過ぎて気が狂いそうです」

今は、エリの首から上と爪先だけが、アナコンダの口から外部に出ていた。

「では、皆さん。エリはこれからアナコンダに呑み込まれます。ああ、駄目、そんなところ刺激しないで。お尻の穴は一番感じるのよ……」

エリは実況を続けながら、とうとうアナコンダの口内に全身を呑み込まれた。

エリの人差し指の指輪とマウスピースに組み込まれた超小型カメラが起動して、アナコンダの口内が映

し出された。カメラに備え付けられている照明が点灯したので、暗い口内をはっきりと確認することができる。

人差し指の指輪に仕掛けられた指輪が、食道に呑み込まれていくエリの下半身を映し出していた。食道の襞からは無数の突起が飛び出し、エリの全身を刺激しながら、胃の内部へと押し込んでいく。

エリは意識があるようで、人差し指の指輪に組み込まれたカメラのアングルを変えて、口内の様子を様々な角度で撮影していた。

「ああ。いいわ。気持ちよ過ぎて、死んじゃいそうよ」

マウスピースに組み込まれたマイクを使い、エリが実況を再開した。

「食道にも無数の突起があり、全身を刺激してきます。気持ちよ過ぎて意識が飛んじゃいそうになります。お尻の穴やオマンコにまで突起が入り込み刺激を与えてきます。私の逝き顔をお見せしますね」

エリがカメラを自分の顔に向けた。大きな瞳は欲情に濡れ、口元には可愛い舌が見え隠れしていた。そうこうしている内に、エリの全身が食道から胃の内部へと運ばれて行った。

「物凄い消化速度です。エリの前に食べられた女がもう消化されて骨になっています」

人差し指に組み込まれたカメラが胃液により白骨化した死体を映し出した。

その時、周りを包み込む胃壁から無数の突起が飛

び出してきて、エリの全身を包み込んだ。アヌスにも膣にも口内にも突起が入り込み、刺激を与えてきた。
「いや。死んじゃう!」
カメラは、余りの快感に全身をくねらせ、泣き叫ぶエリを捉えていた。エリは白目をむいて、激しい勢いで潮を噴いていた。
「だ……駄目です。実況を続けられません。お尻の穴で突起が刺激してきます。オマ*コも……突起でいっぱいです。オッパイも乳首にも張り付いています。脇の下も、爪先にも刺激を与えられています。女達は皆、このようにして最期を迎えるのですね。これだけの……快感を知ったら、普通のSEXでなんて感じなくなるでしょう。エリもこのまま、死んじゃいたいくらいです」
「エリちゃん。しっかりして。死んだら駄目だよ」
暗黒太郎がマイクに向かって必死に叫んだ。マウスピースに組み込まれたスピーカから太郎の悲痛な叫びが聞こえてきた。
「あら、太郎さん。私のことを心配してくれるのね」
「当たり前だよ。もう十分だ。嘔吐剤を使って出ておいで」
「もう少し、この快感を味わいたいの」
「酸素は後、三分しか持たないよ」
「わかったわ。ちゃんと戻るから心配しないでね。ああ……、いいわ。蕩けちゃいそう」

カメラはあまりの快感にのた打ち回るエリの全身と逝き顔を捉えていた。エリの膣とアヌスには巨大な突起が突き刺さり、激しく振動していた。クリトリスも突起に包まれ、絶妙な刺激を与えられていた。エリは逝き続けていた。

何度達したかわからなくなっていた。

「エリちゃん！早く、出てきてよ！」

司会の暗黒太郎が鉄格子にしがみ付き、アナコンダの膨れ上がった腹部に向かい絶叫した。脱出の予定時間を三分も過ぎていた。余りの快感のために失神しているのかも知れない。酸素が切れたらそれでお終いであった。

「おい、オッサン。試合の邪魔だよ」

狼男のピータが、食べかけの美女から顔を離し、太郎を睨み付けた。その女は臍から上を既に食い尽くされており、豊かな尻と長く形の良い両足のみが残されているだけだ。腰の切断面からは、鮮血が噴き出し、内臓が零れ落ちそうになっていた。

「アナコンダさん。お腹の具合はどうでしょうか？」

太郎はピータをまったく無視していた。ピータの地鳴りのような咆哮が聞こえてきた。

「何か、胃のあたりがもたれるんだよ。いい胃薬持ってないかい？」

「そうですか？探してみますよ。では少しお休みとい

ことですね」

太郎は腕時計を見詰めながら、答えた。額からは大粒の汗が滴り落ちていた。

「そうだね。エリという女が消化するまで、この女と遊んでいるよ」

アナコンダは両手に抱いた美女をうつぶせにさせてアヌスに口を付け、激しい勢いで吸い始めた。女は少し前にアナコンダにより舌で膣とアヌスを犯され、何度も絶頂を味合わされており、今も意識が混濁した状態であった。

その時、アナコンダの様子が急変した。ブルブルと震えだした。蒼白な表情で腹部を押さえた。次の瞬間、大量の胃液とともに全裸のエリを吐き出した。アナコンダが床に両手をつき、嘔吐している間に、太郎が檻に入り、衣服でエリの裸身を包み込むようにして抱き上げ、檻から飛び出した。檻の外では番組スタッフが待機しており、ホースで大量の水をエリに注ぎかけた。

「エリちゃん！生きていたんだね！」

太郎は全裸のエリを強く抱きしめた。頬から大粒の涙が流れ落ちた。

「太郎さん。エリのために泣いているの。まあ、嬉しいわ。でももう少しあの中にいたかったな。太郎さん。今度アナコンダと共演する映画の企画をしてよ」

「いいともいいともで、今は何をしたい？」

「とりあえず、熱いシャワーを浴びたいな」
「いいよ。少し休憩だ。俺が連れて行ってあげるね」
太郎は全裸のエリを抱き上げ、シャワールームへと向かった。

第三章　新たなる食材を求めてへと続く